

④ 縄文・弥生移行期の南四国における異系統土器の系譜について

はじめに：居徳遺跡出土異系統土器の議論

居徳遺跡が提起する縄文・弥生移行期の問題に継続して取り組んでいる(宮里 2016・17・18・22a・22b・23)。居徳遺跡についての基本的な論点を示し(宮里 2017・18)、深鉢および磨研鉢の分類・編年により南四国の時間軸と他地域との併行関係を整理した上で(宮里 2022a・b)、系統が入り組んだ南四国の土偶を検討し(宮里 2023)、居徳遺跡の器物に現れる諸系統は東北・北陸・山陰・中部高地・東海・近畿・東九州を射程に考察されるべき主題であることを示した。この積み重ねを土台として、本稿では所謂「東日本系土器」の問題に改めて取り組む。

居徳遺跡をめぐる「東日本系土器」の研究は、出原恵三(2010)の取り組みを基に筆者(宮里 2017)が列举・整理した後、次のように進展した。湯尻修平(2022)は乾式を細分する論考において、筆者が北陸系とした資料について他地域に類例を求めるべきとの考えを示した。関連する資料を実見する機会を得て、筆者自身も意匠や精巧さの違いから変容に重心を移した比較が必要と考えるようになったが、南四国出土土偶の系譜を検討するなかで複数系統の要素を束ね再構成された居徳4D47土偶において折衷の実態を把握した(宮里 2023)。また関根達人(2021・22)は「大洞系A1式装飾壺」⁽¹⁾の来歴を胎土分析(火山ガラス組成)・集成資料により検討し「東北中部の本場の大洞式土器の製作に長けた人物によって中部高地か西南関東地方で製作され、北陸経由で居徳遺跡に搬入された」(関根 2022: 11頁)と具体的な道筋を示した。さらに関根(2023)は「北陸系・中部高地系土器」について乾式・吉岡式・糞置式など関連する系統を具体化し、違和感・折衷・装飾性の高まりといった見解にもとづいて、北陸系土器の多くは「北陸西部出身者によって近畿以西で製作された」(関根 2023: 16頁)と考えた。

以上のように居徳遺跡の「東日本系土器」は多系統・折衷・変様・変容といった概念をもって広域の資料を対象に比較すべき資料群であり、東日本に限らない「異系統土器」(今村 2011)として主題化するのがよいだろう。全容解明にいたる道のりは遠いが、本稿では新たに得られた知見をもとに居徳遺跡の異系統土器とその背景について考える。

1 異系統土器の諸例と系譜

主たる対象は香炉形土器、口唇部杯状突起、環状浮文、隆帯十字区画の各資料である。また新たな位置づけを得た木葉文小壺にも言及し、関連する問題について考える。

(1) 香炉形土器

香炉形土器として取り上げるのは居徳遺跡1A74(第Ⅳ④-1図1)・1C198(第Ⅳ④-1図2)・1A304(第Ⅳ④-1図3)である。報告時は器種不詳であり、1A74・1A304は「壺または注口土器の一部か」、1C198は「壺・胴部片と考えられるが、複雑な湾曲を呈しており、天地・左右とも明らかでない。…外面の重弧状の沈線4条を描き、重弧の内側に木葉文状の区画文を沈線により陽刻する。…搬入品の可能性がある」とされた。鈴木正博(2007)は、1A74が隆線による工字文が小型化・略化し浮線文化した特殊壺、1A304を沈線文で三叉文を構成した特殊壺とし、両者を「沈線文-隆線文系土器群」とまとめた。また関根達人(2023)は「非在地系土器」を検討するなかで、1A74・1A304について三叉文・内面調整・器壁厚の特徴を指摘しながら「特殊壺のような異形の袋物もしくは土製品」の可能性をあげ、系譜を不明とした。

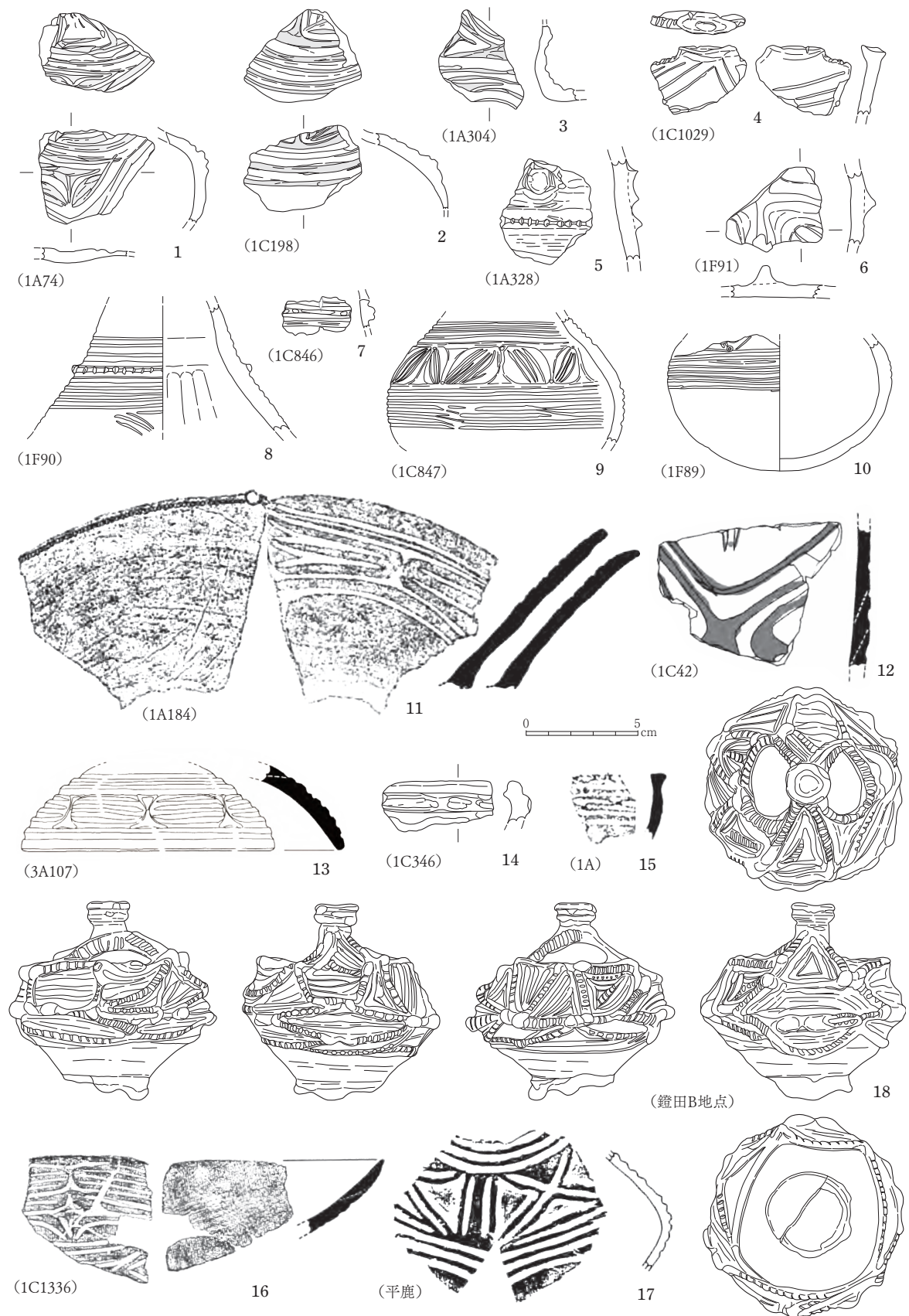
1A74・1C198・1A304は、黒色磨研仕上げ、長石・石英粒をふくむ肌理の細かい胎土(搬入品)、器壁の厚みや丁寧な内面ナデ、反りのある三角形パネルを接いだような屈折の強い器形、ミガキ隆帯による三叉文意匠などの共通性により、同一個体ないしは同型・同類の土器と評価できる。1A304には沈線表現も認められるが内折部位への施文であり、隆線基調における不徹底箇所とみられる。1C198が1C区ⅣB層出土であり、他の異系統土器と併せて考えれば筆者の第8段階(第Ⅳ④-5図)となろう。1A74・1C198はおよそ同一部位で、1A304は部位が異なる。1A74は三角形パネルの底辺を直角に近い角度で接合した形状である。下方は曲率が小さく面状で、上方は横方向に湾曲して内くぼみの形状となる。1C198も同様であるが下方については外膨らみで壺胴部のような形状となる。1A304は三角形パネルが谷折りに接合された形状で、上方はやや内反り、わずかに遺存する下方には横方向に連ねたパネルの接ぎ目らしき縦方向の隆起がみられる。3点いずれも器壁の厚みが一定せず2~5mmの振幅がある。厚みの違いは横方向に顕著で粘土紐積上げとは異なる複雑な造形を思わせる。文様は中心の(Y字形に類する)三叉文意匠を隆線表現の三角形が囲む、一種の重三角文を基調とする。1C198の下方は横走2条隆線であり部位により文様構成が異なる。

これら3点を香炉形土器と考えるのは釧田遺跡出土資料(第Ⅳ④-1図18)による。釧田遺跡(秋田県教育庁社会教育課編 1974、根岸編 2021)は秋田県湯沢市に所在する低湿地遺跡で、1974年に圃場整備事業に伴う発掘調査が実施された。A地点出土の結髪土偶により居徳遺跡との関わりを指摘した遺跡であるが(宮里 2023)、香炉形土器はA地点の東30mにあたるB地点から出土した。B地点には詳細な報告がなく共伴遺物は不明である。香炉形土器は器高8.6cm、胴径8.8cmの小型品で、算盤玉状の胴部に端部が隆起する中実の筒状部と高台状の底部がつく。胴部は、刻目隆帯に縁取られた三角形・台形・方形・杏仁形の区画がパズルのように組み合せて造形される。胴最大径から下方にかけては杏仁形区画が上下二段で交互に接続され(下段)、最大径から上方にかけての内傾部分には方形や台形を間に挟みながら三角形区画が交互に接続される(中段)。中段上端には、対角位置に三角形区画が強い屈折をもって接続され頂角が筒状部につながる(上段)。連結のない両側は楕円形の透孔で香炉の口となる。刻目隆帯の各所には、連結点を中心に一对または単独の塊状隆起が加えられる。区画内には任意の辺に平行する凹線を連ねて重三角文や集線文を描出する。文様部をふくめ外面はミガキ仕上げであるが細部は粗い。色調は褐灰色で黒色磨研にはいたらない。内面は完形のゆえ十分な観察ができず厚みの振幅は確認できなかったが、丁寧なナデ仕上げであり下位にはコゲも認められた。

居徳遺跡の3点が釧田の香炉形土器と同形であるなら、1A74・1C198は中段から上段にいたる屈折部分、1A304は上段の筒状部に近い箇所と推定できる。3点が同一個体であるなら1A304と1A74がつながる可能性があり、1A304の右上斜辺は透孔に沿った部位となろう。居徳と釧田を比較すると、居徳は釧田よりサイズが大きく倍近くとなる。また居徳には刻目隆帯がみられず、区画内の文様も平行線基調の釧田に対し居徳は三叉文が中心となる。類例に乏しい現時点では両者の類似性を強調したいが、土偶ほどではなくともやはり重要な差異があり、いずれ経由地での変容に焦点が移るだろう。一方で釧田の香炉形土器自体も型式や時期が未決でありさらなる検討を要する。

(2) 口唇部杯状突起

口唇部杯状突起として検討するのは居徳遺跡1C1029である(第Ⅳ④-1図4)。報告では「深鉢～甕…波状口縁」とされた。「東日本系」とはやや性格が異なるが異系統土器の議論に与する資料である。鉢形土器の口縁とみられ、器壁の厚みは5mm程度、やや外傾しながら上方に立ちあがる器形である。口縁は緩い波状であり波頭部の口唇に突起をもつ。口唇部の突起は上面が楕円形、正面が方形で、上面は浅く凹む。突起は内外に張り出すが内方の張出しがより強い。突起をのぞく口唇部はナデで面取りされ細かい刻みが連続する。器面の内外にはヘラ描きの重弧文が施される。外面は突起の下位で接続



第IV④-1図 居徳遺跡出土異系統土器(1~16)と関連資料(17・18)

する2～3条の重弧文であり、内面は突起位置を斜めに横切る3条の重弧文である。外面については規則的な重弧文を想定できるが、内面は文様の展開を予想し難しい。外面の下端には隆起部が僅かに遺存し、浮文や隆帯があったと考えられる。色調は鈍い黄褐色で胎土にはチャート粒を含み、全体には在地産弥生土器の印象をあたえる。

1C1029は在来土器のなかでは波状口縁鉢(宮里 2022b)に近い。波状口縁鉢は波状口縁の内面をめぐる2～3条の重弧文が特徴で、波状口縁方形浅鉢および内折口径鉢から変化した第8段階の磨研鉢である(第Ⅳ④-5図)。両者の類似点は内面の重弧文のみでむしろ差異点が際立ち、口唇部杯状突起、口唇部刻み、外面重弧文については他の系統に類例を求める必要がある。

口唇部刻みについては適当な事例を欠くが、例えば居徳1A184(第Ⅳ④-1図11)のような北陸系浅鉢の口唇部に細かな刻みがあり、また突帯文深鉢の刻みが細密化する時期でもあるため要素自体は在地にもある。

波状口縁鉢の内面重弧文は2条に始まり多条化すると考えたが(宮里 2022b)、内面に複数条の重弧文をもつ鉢は北陸にもあり、関根達人(2023)は糞置式や乾式の鉢(第Ⅳ④-3図5・6)との関わりを示唆した。設楽博己(2004)は智頭枕田の資料(第Ⅳ④-2図22)に北陸と山陰の交流を読みとったが、三谷(第Ⅳ④-2図11)と智頭枕田(第Ⅳ④-2図23)は重弧文接続部に縦スリットを入れる点が共通しており、波状口縁鉢は北陸・山陰・四国の繋がりを考慮すべき資料ともなる。居徳1A184の外面重弧文は智頭枕田(第Ⅳ④-2図23)に類例がありやはり山陰との関係が射程に入る。

口唇部杯状突起は時期を問わなければ縄文土器にしばしばみられる特徴である。第8段階併行(大洞A式併行)で類例を求めると、東北地方の台付鉢(鎧田遺跡他)にみられる精巧なつくりの突起、その略化形態とみられる北陸(第Ⅳ④-3図13)・中部高地(第Ⅳ④-4図5)・東海(第Ⅳ④-4図11・17)の事例が挙がる。やや時期をひろげると山陰地域の原田遺跡1区(第Ⅳ④-2図16)に関連資料がある。縄文後期後半から晩期末までをふくむ包含層から出土したもので、全形は不明であるが磨研鉢の口縁部にあたる。器面調整はミガキに至らない丁寧なナデで、色調は橙色、口唇部は丸みのある面取りで、口縁形態は筆者分類(宮里 2016)のg類にあたる。口唇部の突起は居徳1C1029の突起が2つ連なったような形状で、上面が浅く凹み内側への張出しが強い。突起の正面形は両端が高く隆起しており、黒川式や篠原式に通有のりボン状突起から派生した形態と評価できる。第5～7段階(第Ⅳ④-5図)の刻目突帯文期のなかでもやや時期が下るとみられるが、居徳1C1029との間には時期差がある。山陰との関係を示唆する資料ではあるが、時期差と変様過程について検討の余地が残る。

(3) 環状浮文

居徳遺跡1A328(第Ⅳ④-1図5)は胴部突帯をもつ刻目突帯文深鉢で環状浮文の添付に特徴がある。突帯はやや低平だが稜が明瞭な垂下気味の断面三角突帯で、小さく浅いV字ないしD字形刻みが加えられる。外面調整は突帯を境界に上下で異なり、上部はナデ、下部は繊維束の擦痕で仕上げられる。刻目突帯の形状によれば第8段階(第Ⅳ④-5図)の資料となる。環状浮文は粗雑な五角形に近い形状で、突帯からやや間をおいた上部に縁辺を粗くナデつけるようにして添付される。

類似する環状浮文は山陰地域の深鉢(第Ⅳ④-2図17)にみられる。同類の資料については幸泉満夫(2019・20a)による谷尻系の成立に関連した位置づけがある。幸泉によれば、環状浮文のルーツは東日本の瘤付文系にあって、日本海沿岸で継承されたものが谷尻式にまで遺存するのであり、居徳1A328の類例は谷尻式成立前後に集中する。山陰で環状浮文をもつ該期の深鉢はしばしば口唇部に突起をもち、杯状のもの(第Ⅳ④-2図17)も認められる。上述の口唇部杯状突起の類例ともなり得るが時期差が大きい。強いてひろく類例を求めると東海(第Ⅳ④-4図11)や北陸(第Ⅳ④-3図22)に関連資料がみられるが、時期差や変容の問題を解決せねばならない。

(4) 隆帯十字区画

居徳遺跡 1F91 は「縄文／壺／胴体部」と報告されたが器種同定は困難である。ケズリない繊維束で粗く仕上げられた内面は黒く煤けており壺のような袋状の器形が想定されるが、横方向は曲率が小さく板状であり全形を窺いがたい。際立った特徴は外面の十字に交叉する隆帯である。十字の隆帯は裾幅1cm、高さは5～8mmの断面隅丸台形で刻目ではなく素文である。縦の隆帯は交差部分を境に下方が高く、器形が内傾する上方に向かって次第に高さを減じる。隆帯に区画された各面には、隆帯裾に沿った彫去凹帯により隅丸パネル状の浮出しが作出される。浮出しには2条の平行沈線があり先端が楕円をなすように収束する。外面はミガキ仕上げで、色調は赤みを帯びた橙色、胎土はチャート粒が多く黒雲母を僅かに含む。在地産でもよいがやや違和感がある。層位では限定できないが、装飾手法の共通性により「東日本系」の範疇に入る。

居徳遺跡には隆帯装飾の類品に「縦隆帯」土器(宮里 2022b)があるが、横隆帯や浮出しがなくやや類似度が低い。十字区画およびパネル状の浮出しにおいては1C42や1A308が類品となる。1A42(第Ⅳ④-1図12)は板状の土器片で、内外面ともに黒褐色のミガキ仕上げである。外面は十字形の彫去により器面が分割され、各区には凹線や弧状の彫去により浮出しが作出される。凹部には丹彩が認められる。浮出しには2条の平行沈線があり先端は直線的に収まる。やや離れた位置に方向の異なる沈線の端部が認められ、全体には叉状の意匠であった可能性がある。1A308もほぼ同様の構成であるが器壁が厚くつくりも粗い。隆帯と彫去の違いを措けば意匠の類似度は高い。ただし1C42は1C区ⅣD層出土であるため他の東日本系に先行する第7段階(第Ⅳ④-5図)となり時期差が問題となる。

隆帯に区画されたパネル状の浮出しには三谷遺跡の事例(第Ⅳ④-2図8)がある。頸が窄まる壺形の器形で、低平な刻目突帯で上縁を区切った胴部に、同じ刻目突帯で縁取った隅丸方形区画を上下二段で横方向に配置する。隣り合う隅丸方形区画の間は上端が三叉形、中位は十字形となる。区画内には凹線による隅丸方形の浮出しが作出され、内部には重圏文や重弧文が充填される。色調は橙色で全体につくりが粗く弥生土器の様相を呈する。居徳1F91とは器形が大きく異なり意匠のみの類似となる。

さらに広く類例をもとめると長野県一津遺跡に隆帯を縦横に配する鉢(第Ⅳ④-4図9)がある。縦隆帯の位置に波頭部をもつ波状口縁の鉢とみられる。下半部は浮線(上半)と隆線(下半)が混在する集線帯で、上半部には大振りの隆帯が縦横に付せられる。縦隆帯は幅1cm、高さ1cmで、集線帯と接する下端から上方に向かって高さを増し、最大径位置をピークに口縁に向かって低まる。縦隆帯のやや下寄り位置では大振りの眼鏡状隆帯が交叉し、やや上位には横方向の大振りの口唇状突起が、縦隆帯からやや間をおいた均等位置に付せられる。隆帯は区画帯というよりは主たる装飾要素であり居徳1F91とはやや異なる。参考資料としておく。

(5) 木葉文小壺

木葉文小壺も「東日本系」ではないが異系統問題の重要資料である。近年、春成秀爾(2021・2023a・b)により新たな位置づけが示された。該当資料は居徳遺跡1C846・1C847・1F89・1F90(第Ⅳ④-1図7～10)である。4点は多条のミガキ沈線、チャートを主に黒色ガラス質岩粒を含む胎土、色調・調整の共通性などにより同類・同型の資料と判断できる。1C846・1C847は1CⅣB層出土で第8段階(第Ⅳ④-5図)相当となる。1C847・1F89は同一個体とみられるが接合部はない。1F90は器壁が厚くまた復元径も大きいため、1C847・1C848とは別個体となる。1C846は略化した眼鏡状隆帯がめぐる小片で、春成(2021)の復原のように頸部突帯の可能性があるが接合部はない。1C847・1F89は最大径10.5cmの小型壺で、頸部は径6cm程度まで窄まる。胴部の上下に配されたミガキ沈線による集線は上が5条、下が6条で中間に木葉文意匠の文様帯を挟む。木葉文帯は、上下交互に配される三叉形彫去により作出された、一方の対角が隅丸となる平行四辺形様(木葉形)の浮出しに、4本前後の沈線を三叉形先端の凹点

を結ぶ方向に充填する。両端が束状となる平行沈線は全体が紡錘形を呈する。1F90では木葉文帯の上に5条集線、刻目突帯、4条集線、無文部つづく。刻目突帯が頸胴部境界となり頸部下端にも集線帯をおく構成が復元できる。

出原(2010)は1C847について、北陸の浮線文を木葉文の起源とする設楽(2004)の考えをもとに、北陸系土器の意匠から派生した最古の木葉文と位置づけた。1F89・1F90については胎土・色調により弥生土器化したものと評価した。春成秀爾(2021・23a・b)は木葉文をA～E式に分類し、遠賀川式最古の木葉文を析出した上で、木葉文の出現過程を櫃原式→三谷式→居徳式とした。窄口形鉢(第Ⅳ④-2図3)の三谷を居徳に先行させ、櫃原式と居徳式の間におく理路は説得力があるが、文様においてはむしろ櫃原式と居徳式の類似度が高く、中間の三谷式は迂回する印象である。春成(2021)が例示した鹿児島県仁田川付近採集の石棒(藤森 1942)は居徳の木葉文と酷似しており、櫃原式文様にかかわる一連の議論(深澤 1989、設楽 2009、宮地 2017 など)にしたがって別素材に継承された意匠の環流を考慮する必要がある。いずれにせよ、範描き木葉文の発生地を備讃地域とした春成(2023a・b)の指摘は大きな意味があり、後述のように三谷と居徳の木葉文に関わる系統問題は山陰と四国の繋がりから検討すべき課題となる。

2 異系統土器の背景

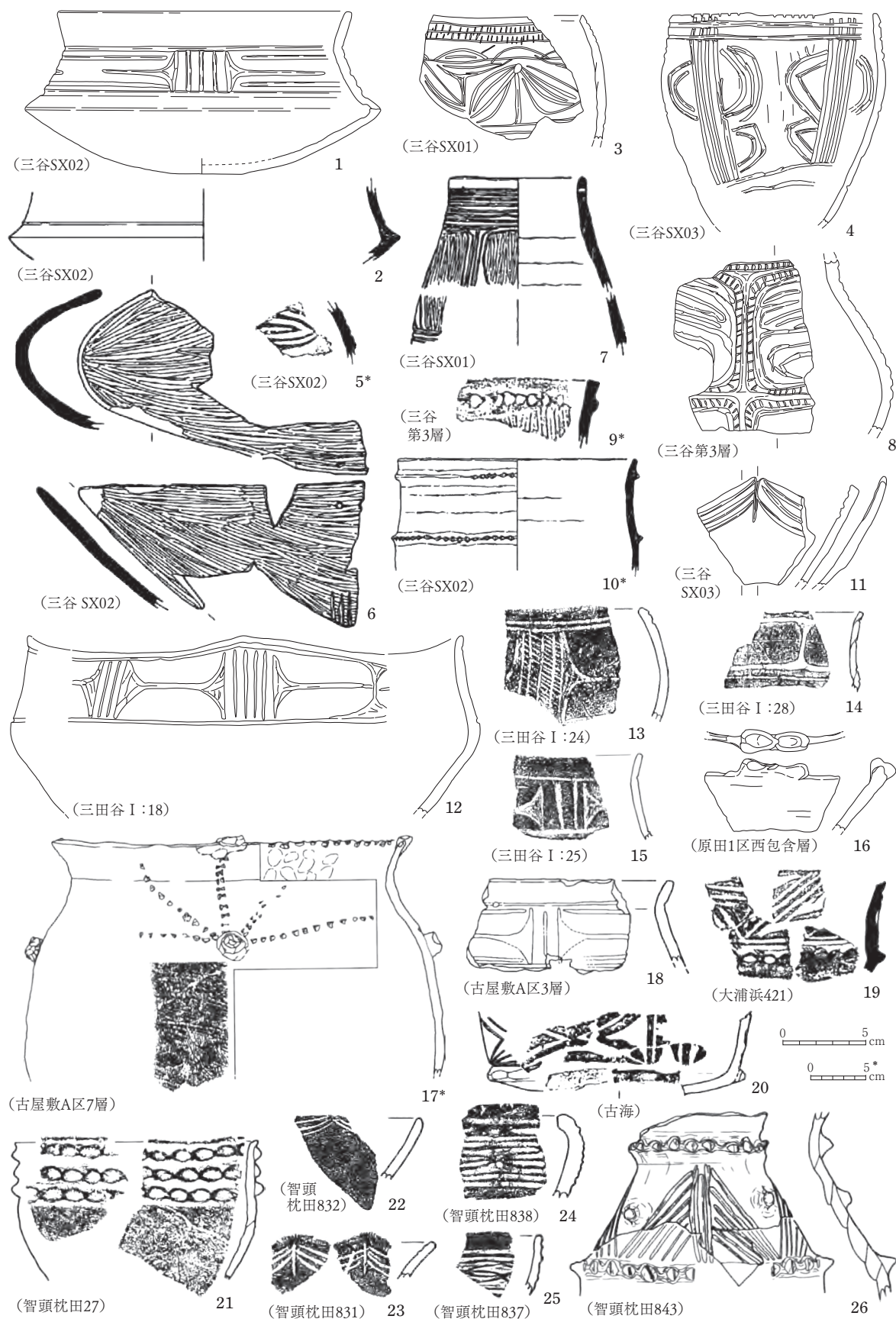
居徳遺跡出土の異系統土器について新たな知見を加え検討した。土偶の系統(宮里 2023)を併せると関連する地域には東北・北陸・中部高地・東海・近畿・山陰が挙げられ、これら地域との関係をより具体化することがさらなる課題となる。居徳遺跡に現れた異系統土器は、大洞式縦区画帯装飾壺をのぞけば、模倣・再現度の低い変容型や、一部要素のみの移植である。こうした考古学的事象を歴史事象として適切に問題化するために、いましばらくは関連資料の整理を積み上げねばならない。以下、いくつかの資料を概括し背景についての見通しを示す。

(1) 舟形土器と浮線文

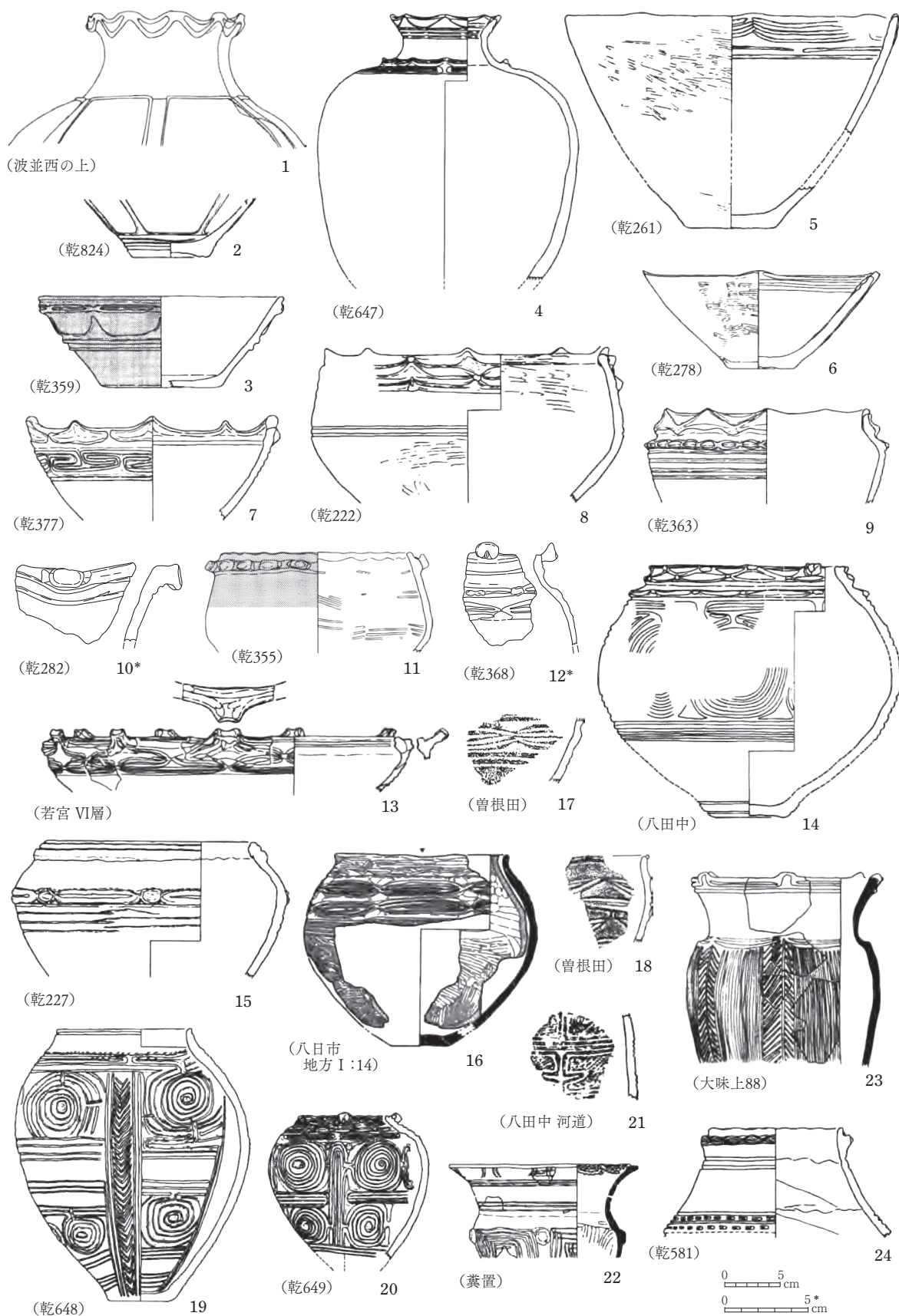
舟形土器は楕円形の底部から両端が舳状に立ち上がる器形が特徴で、しばしば側面および外底に文様を加えられる。楕円形の底部から上方に立ちあがる器形(富山県下老子笹川遺跡、香川県林・坊城遺跡など)もあるが、それらは筒形土器の類品と思える。舟形土器には長野県一津遺跡(第Ⅳ④-4図2)、大阪府池島・福万寺遺跡(第Ⅳ④-4図24)、徳島県三谷遺跡(第Ⅳ④-2図6)の類例があり、池島・福万寺の浮線文によれば中部高地を発信源に波及したとみられる。一津は隆線の工字文、池島・福万寺は網目の一部が交叉して二重となる浮線文であり、女鳥羽川式から氷Ⅰ式古段階にかけての資料となる。三谷遺跡には舟形土器と共に浮線文土器(第Ⅳ④-2図5)があり、池島・福万寺の近傍では讃良郡条里遺跡から浮線文鉢(第Ⅳ④-4図23)が出土するなど、舟形土器は大洞A式期において浮線文土器と結びついて波及した希少品と考えることができる。居徳遺跡には浮線文土器が少ないが、女鳥羽川式(第Ⅳ④-1図14)や離山～氷Ⅰ式古段階(第Ⅳ④-1図15)の鉢があり、該期の波及圏内にあったと分かる。

浮線文土器と舟形土器の西日本への波及については久田正弘(2013)の論考がある。久田は舟形土器の類例を胎土の特徴と併せて検討し、池島・福万寺の胎土が長野県域の資料と異なることを指摘しながら、舟形土器波及の背景にある大洞系土器－北陸の関係を示唆した。さらに該期の交流にかかわる資料として大洞系縦区画帯装飾壺、筒形容器、浮線渦巻文土器、柴山出村式土器などを挙げ、問題のひろがりを示した。

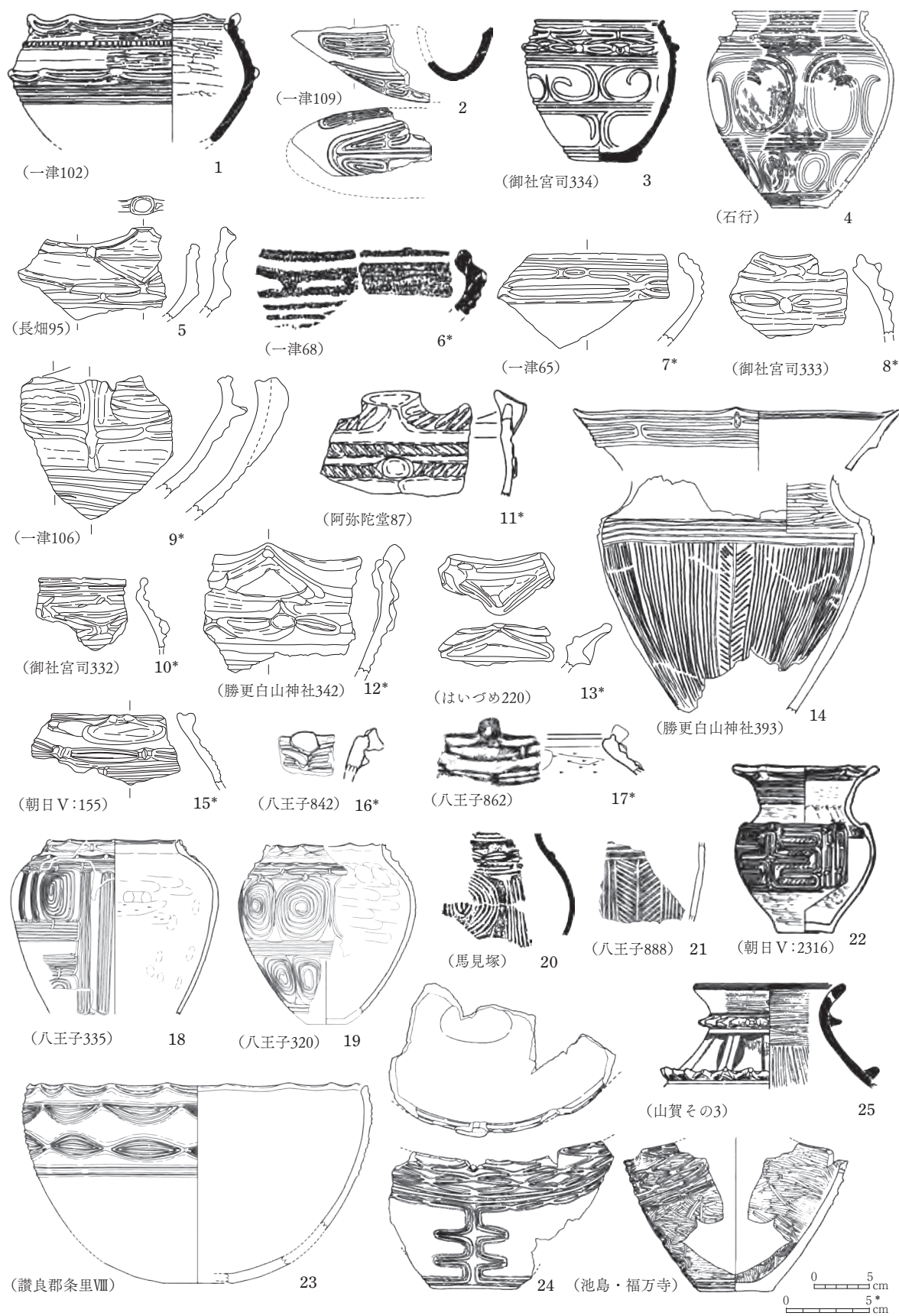
浮線文の波及については、設楽博己(2004)が木葉文の起源を浮線文に求める論考で言及しており注意される。問題とされたのは杉田型レンズ状浮線文(鈴木 1985)とされる陽刻の紡錘形意匠であり、三分岐浮線(第Ⅳ④-2図24、第Ⅳ④-4図7)がレンズ形・紡錘形に文様化したものと理解される。設楽



第IV④-2図 関連資料(徳島・島根・鳥取)



第Ⅳ④-3図 関連資料(石川・福井)



第IV④-4図 関連資料(長野・岐阜・愛知・大阪)

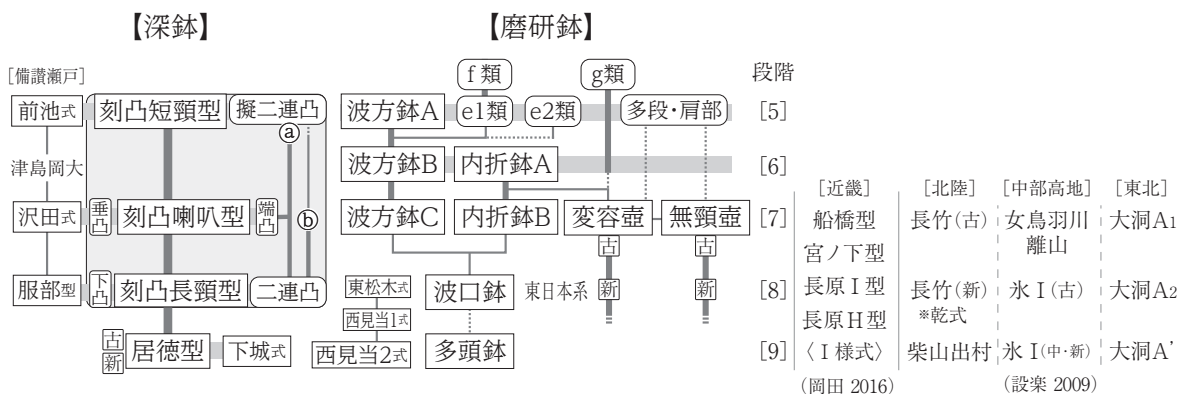
は八日市地方の浮線文鉢(第Ⅳ④-3図16など)を北陸特有の長竹式浮線文系土器と類型化し、北陸から山陰に及んだ浮線文が木葉文を成立させたと考えたが、紡錘形に文様化した浮線文は各地で確認されており(第Ⅳ④-2図5、第Ⅳ④-3図17、第Ⅳ④-4図23)、むしろ広域に波及する浮線文の時期的な特徴と思える。本稿の関心においては、居徳遺跡に紡錘形の浮線文がみられず、派生形としての楕円形浮出しが顕著である点が重要となる。

(2) 突起と隆帯、浮線渦巻文土器の展開

東北や中部高地、北陸を発信源として壺や鉢などの精製器種が西日本に波及する時代状況であるが、北陸・東海からの発信を考慮すべき器物に浮線渦巻文土器がある。浮線渦巻文土器は製品自体ではなく要素や傾向の波及を検討すべき資料であり、具体的には角状の突起や隆帯の強調が論点となる。

角状の突起は大洞系縦区画帯装飾壺の口縁に顕著であり、頂角が斜め上方に突出する立体的な三角形が横繋ぎで口縁をめぐり突起帯を構成する(第Ⅳ④-3図4など)。角状突起帯は鉢に転用され北陸や飛騨地方を中心に多様な展開をみせる(第Ⅳ④-3図7・9、第Ⅳ④-4図12・13)。突起の造形は眼鏡状隆帯にもおよび、接続部を突出させた角状突起帯が大洞系縦区画帯装飾壺の口縁(第Ⅳ④-3図1)や鉢形土器の口縁および文様帯縁辺(第Ⅳ④-4図1)を飾る。また対向三角文帯の接続部が小さく突出したり(第Ⅳ④-3図14)、眼鏡状隆帯の接続部が環状に隆起したり(第Ⅳ④-3図15)、杯状に類する突起が突起帯となって口縁をめぐったり(第Ⅳ④-3図11)、眼鏡状隆帯が高く隆起する(第Ⅳ④-3図9・24)など、該期の土器は様々な様態で「突起・隆起傾向」を強める。こうした角状突起帯・眼鏡状隆帯は北陸・飛騨・中部高地を中心に、特徴的な窄口形の鉢形器種を構成する(第Ⅳ④-3図8・9・15、第Ⅳ④-4図1・8・12)。これら突起・隆起傾向が顕著な窄口形鉢形土器を基体に産み出されたのが浮線渦巻文土器である。

浮線渦巻文土器は杉原荘介(1949)が西志賀遺跡出土資料のうちに見出した特異な器種であり、久田正弘(1988)、神村透(1988)らによる集成・検討により、東海・北陸・中部高地にかけて分布する、所謂「大地型壺」(江崎 1965)につながる器種として内容が整理・把握された。浮線渦巻文土器をふくむ型式変化は紅村弘(1956)、石川日出志(1981)により3段階(無頸→短頸→長頸)に整理され、久田(1988)が地域ごとの組列を示したことにより概況が把握された。相対的に新しい長頸の資料群は「沈線紋系土器」として別途主題化され(永井 1994)、詳細な分類にもとづき変遷や地域間関係が整理されている。実見した資料によれば浮線渦巻文土器の多くは粗雑な隆線文ないし沈線文であり、大きくは隆線から沈線に替わるとみてよい。浮線渦巻文土器は鉢が転化した壺と理解されるが、類例のうちで先行する窄口鉢に近いのは石川県八田中資料(第Ⅳ④-3図14)である。八田中を始点として、長胴化した胴部の文様が上下二段構成となり無頸壺(第Ⅳ④-3図19・20、第Ⅳ④-4図3)の形制が整ったと考えられる。



第Ⅳ④-5図 地域間の併行関係

縄文・弥生移行期における在来器種の壺化という点において、浅鉢変容壺、深鉢変容壺、南四国の浅鉢系無頸壺と同類であり、「白山・御嶽環状ネットワーク」(永井 1994)において生じた、縄文系弥生文化の一種と考えることができる。浮線渦巻文土器の系統は被熱痕の顕著な壺であり⁽²⁾(永井 1994)、壺文化受容の特異な一様態として主題化されるべき資料である。沈線紋系土器の段階にいたっても同型の壺(第Ⅳ④-3図21・22・23、第Ⅳ④-4図14・22)が北陸から東海にかけて共通してみられ、特異な壺文化が持続的に分布圏を形成したと評価できる。

突起・隆起装飾帯をもつ窄口形鉢から浮線渦巻文土器、沈線紋系土器にいたる一連の資料のなかには、杯状に類する突起(第Ⅳ④-3図10・11・20、第Ⅳ④-4図16・17)や環状浮文(第Ⅳ④-3図15・22)が散見される。要素・傾向の波及を議論する土台となるが、関連する事象に豆谷和之(1995・2002)が「指づくね貼付突帯」とした遠賀川式壺に現れる特徴的な突起帯がある。指づくね貼付突帯をもつ壺(第Ⅳ④-4図25)は近畿を中心に分布し、豆谷はこの突帯の淵源を大洞C2式～A式(古)の浅鉢に特徴的な眼鏡状隆帯に求め、馬見塚式や下野式、浮線渦巻文土器を加えて関係性を検討した。豆谷(2002)は問題となる時期差を解消するため、木製品など別素材に移植された意匠の環流を想定したが、筆者は要素・傾向の波及という観点から、指づくね貼付突帯を近畿で生じた「突起・隆起傾向」の派生態と考える。関連する事例に鳥取県智頭枕田遺跡の壺(第Ⅳ④-2図26)がある。智頭枕田の壺は、頸部の上下境界につよいユビオサエで連続的に作出した突起帯をめぐらし、頸部には上向き三角形の中心に分割線をひき両側に斜辺に平行する集線を充填した文様モチーフを4単位おく。三角文のあいだの無文部には乳突起が加えられる。図では欠けているが外反する口縁は端部がやや肥厚し、口唇部はナデにより浅く凹む。指づくね貼付突帯壺は特殊文様に特異性があるが(豆谷 1995)、智頭枕田にはさらなる変容が認められる。智頭枕田の指づくね貼付突帯壺は筆者の第9段階(第Ⅳ④-5図)併行とみられるが、これに先行する離山式浮線文鉢(第Ⅳ④-2図24・25)の時期には、眼鏡状隆帯に類する突帯を3条めぐらした深鉢(第Ⅳ④-2図21)があり、「突起・隆起傾向」の影響が持続的に及んだともいえる。

(3) 居徳、三谷と山陰・北陸との関係

三谷遺跡には前述のように中部高地(第Ⅳ④-2図5・6)との繋がりがみられるが、窄口形鉢(第Ⅳ④-2図4)の重弧文が長竹式に類似し、短頸壺(第Ⅳ④-2図7)の縦区画帯が北陸経由で受容した大洞式縦区画帯装飾壺の意匠と考えられるなど、北陸との関係も認められる。他に内面重弧文の鉢(第Ⅳ④-2図11)は北陸・山陰との関係を示唆しており系統は多岐にわたるが、三谷の系統をより具体的に示す資料として「三田谷文様」があがる。岡田憲一(2000)によれば、三田谷文様は三角刳込文を横位・縦位において文様を構成した北陸系文様のうち晩期終末に現れたものを指す。鳥根県三田谷Ⅰ遺跡の資料が典型であり、他に鳥根県古屋敷遺跡や鳥取県古海遺跡など山陰地域に類例がある。三谷遺跡の関連資料(第Ⅳ④-2図1)は、T字形三叉文と器形において三田谷文様鉢との類似度が高く、両者の直接的な関係を窺わせる。岡田は「横位三角刳込文の断絶」や「縦位連結三角形刳込文の退縮」の方向で変化(第Ⅳ④-2図12→15)した先に三谷資料を位置づけた。三谷資料は、浅鉢変容壺(第Ⅳ④-2図14)に連動する壺化の進んだ器形(鈴木 2000)をもち、文様においては三叉形彫去による浮出しがなく文様帯区画はヘラミガキ沈線による上下界線のみとなる。山陰の資料では古屋敷(第Ⅳ④-2図18)に類似し、三田谷文様鉢の最新段階に相当すると分かる。三谷遺跡の木葉文をもつ窄口形鉢は相対的に古相を示す資料であるが、三田谷遺跡(第Ⅳ④-2図13)には三田谷文様をもつ同形の資料がある。三田谷遺跡においても窄口形鉢は古く位置づけられるので、両地域に一定期間の持続的な交流があったと分かる。また、三田谷文様と木葉文をふくむ、中国山地を越えた南北交流の資料に鳥取県古海遺跡および香川県大浦浜遺跡から出土した鉢形土器(第Ⅳ④-2図19・20)がある。いずれも全形は不明であるが、眼鏡状隆帯に類する突帯を変曲点として上方に立ちあがる器形が共通し、古海資料(第Ⅳ④-2図20)

には第2段階(第Ⅳ④-2図15)にあたる三田谷文様が、大浦浜資料(第Ⅳ④-2図19)には木葉文が施される。これら一連の資料により山陰と四国のあいだの交流が一定期間、三田谷文様と木葉文をもちつつ展開したと分かる。なお、三田谷文様は八日市新保式との類似から、櫃原式文様と同様の問題を抱えつつ、北陸と山陰の結びつきを示す資料と理解されるが(設楽 2009など)、古海遺跡(第Ⅳ④-2図20)の三叉形彫去文と秋田県平鹿遺跡(第Ⅳ④-1図17)の三角形彫去文を関連づけるなら、三田谷文様が、鈴木正博(2000)がT字形三叉文の関連資料として示した大洞C2式～大洞A1式土器の影響を受けて出現した可能性が考慮される。

居徳と山陰の繋がりについては、口唇部杯状突起や環状浮文において可能性を指摘したが、三谷遺跡に比べれば結びつきは弱い。他方、居徳と山陰には対向する三叉形彫去により隅丸台形の浮出しの作出する点に共通性がある(第Ⅳ④-1図11、第Ⅳ④-2図12)。ただし浮出しに施文される三叉文には違いがあり、三田谷ではT字形三叉文(第Ⅳ④-2図12)を1単位、居徳ではY字形三叉文(第Ⅳ④-1図11)を2単位加える。このY字形三叉文および類した三叉文(第Ⅳ④-1図1)は居徳に特有で、山陰あるいは北陸とも異なる地域的な特徴といえる。また居徳の三叉形彫去による浮出しは楕円形が顕著である(第Ⅳ④-1図13・16)。楕円形の浮出しは併行期の資料を対照すると紡錘形に文様化した浮線文から派生したと考えられるが(石川 1985、鈴木 1985、設楽 2004)、楕円形の浮出しは殊の外他地域に少なく、とくに居徳で好まれた意匠といえる。

蓋は、筒形土器と共に北陸と居徳をつなぐ主要要素と考えられたが(鈴木 2007)、関根(2002)は起源と目される北陸地方に該当する器種がなく、また居徳遺跡に蓋と組み合う壺形土器が認められないことから、全てを浅鉢と考えた(第Ⅳ④-1図13他)。確かに北陸地域において蓋が消失する時期にあたり道理であるが、一方で木胎彩色漆器が蓋として現れたことが気に掛かる。強いて蓋に対応する器種を居徳遺跡に求めると、変容壺の一種である浅鉢系無頸壺(宮里 2022b)がある。浅鉢系無頸壺は口径12cmほどで蓋に対応するともいえるが説明に窮する難点は残る。

むすび

新たな知見を加え居徳遺跡の異系統土器を再論した。香炉形土器は、東北に起源し大型化や細部の変様を伴う搬入品としてもたらされた。口唇部杯状突起・環状浮文については、山陰の可能性を考慮しつつ「突起・隆起傾向」を背景とする現象と考え、北陸・東海・中部地域において浮線渦巻文土器を産み出す流れをひとつの発信力と認めた。隆帯十字区画については大きな変容を伴う要素の波及と考え、木葉文については山陰と四国の交流にふくまれる要素と捉えつつ鉢から壺へと施文対象が替わる状況を確認した。また居徳遺跡と三谷遺跡は北陸系統に共通点があるが、大洞式縦区画帯装飾壺や結髪土偶、香炉形土器など東北起源の器物に特徴がある居徳に対して、三谷は浮線文系の舟形土器や山陰の三田谷文様を特徴とするなど、両者の方向性の違いが浮彫となった。こうした縄文・弥生移行期の入り組んだ状況を整理するために、居徳遺跡においては未定資料に対する系統関係をさらに追求し、くわえて木胎彩色漆器の系譜問題(鈴木 2000、設楽・小林 2007、宮地 2017)にも取り組みたいが、また一方で該期の小さな地域圏を把握することも重要と感じる。

居徳遺跡の第8段階にあたる深鉢は刻凸長頸型(宮里 2022a)であり、備讃瀬戸の服部型(宮里 2002a)の類縁である。三谷遺跡では器体が緩いS字形をなし口縁突帯の位置が低い深鉢(第Ⅳ④-2図10、勝浦 2000)を中心とし、今宿型(丹治 2000)や水走型(岡田 2016)など播磨灘・大阪湾対岸域に通じる。また三谷遺跡には服部型(第Ⅳ④-2図9)が少数ふくまれており瀬戸内との交流も認められる。こうした粗製深鉢の小さな地域性(阿部 1999、大塚 2008)は広域を対象とする異系統問題の基盤となるのであり、関係地域における粗製深鉢の型式と分布圏が明示されることで(幸泉 2020b)、「経由」や「変容」の内容はより具体的なものとなろう。道のりは長いが継続して進めたい。



第IV④－6図 遺跡の位置

本稿をなすにあたり下記の方々・機関からご助言・ご助力を賜りました。記して感謝申し上げます(敬称略、順不同)。

久田正弘、馬場伸一郎、根岸洋、あいち朝日遺跡ミュージアム、秋田県立博物館、石川県埋蔵文化財センター、一宮市博物館、大阪府文化財センター、大町市文化財センター、岐阜県文化財保護センター、高知県埋蔵文化財センター、島根県教育庁埋蔵文化財センター、智頭町教育委員会、尖石縄文考古館、徳島市立考古資料館、福井県教育庁埋蔵文化財センター、湯沢市教育委員会

註

- (1) 報告では「大洞式土器」(高知県埋蔵文化財センター編 2002)とされ、鈴木正博(2007)は「特殊壺」、設楽博己(2009)、久田正弘(2013)は「隆線連子文」とし、関根達人(2022)は「大洞A1式装飾壺」「(大洞A1式)連子窓文壺」、関連資料を「(大洞A1式)縦区画文壺」と呼称した。本稿では、胴部に縦長の長方形区画を横繋ぎにした文様帯をもち、口縁部に角状突起帯や隆帯を加え、ときに漆塗りされる装飾土器として、便宜的に「(大洞式または大洞系)縦区画帯装飾壺」とする。
- (2) 北陸における浮線渦巻文土器の顕著な被熱痕については久田正弘氏から教示を受けた。

文献

- 阿部芳郎、1999、「精製土器と粗製土器—学史的検討と土器型式による地域認識の問題—」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第9集、帝京大学山梨文化財研究所、265～284頁
- 石川日出志、1981、「三河・尾張における弥生文化の成立—水神平式土器の成立過程について—」『駿台史学』第52号、駿台史学会、39～72頁
- 石川日出志、1985、「中部地方以西の縄文時代晩期浮線文土器」『信濃』第37巻第4号、信濃史学会、152～169頁
- 今村啓爾、2011、「異系統土器の出会い—土器研究の可能性を求めて—」『異系統土器の出会い』、同成社、1～26頁
- 江崎武、1965、「所謂「大地式土器」の再検討」『いちのみや考古』第6号、一宮考古学会、35～39頁
- 大塚達朗、2008、「精製土器と粗製土器」『縄文時代の考古学7 土器を読み取る—縄文土器の情報—』、同成社、312～322頁
- 岡田憲一、2000、「三田谷 I 遺跡出土土器文様をめぐる問題」『三田谷 I 遺跡 Vol.3』、島根県教育委員会、81～84頁
- 岡田憲一、2016、「「凸帯文」と「遠賀川」の接続—奈良県観音寺本馬遺跡出土凸帯文土器の評価—」『魂の考古学—豆谷和之さん追悼論文集—』、豆谷和之さん追悼事業会、11～22頁
- 勝浦康守、2000、「徳島の突帯文土器と遠賀川式土器—三谷遺跡・名東遺跡資料の検討—」『突帯文と遠賀川』、土器持寄会論文集刊行会、453～470頁
- 神村透、1988、「浮線渦巻文土器」『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題—縄文から弥生— 資料編Ⅱ・研究編』、愛知考古学談話会、83～90頁
- 幸泉満夫、2019・20a、「谷尻系土器群の研究(上・下)」『縄文時代』第30・31号、縄文時代文化研究会、111～128頁／79～101頁
- 幸泉満夫、2020b、「縄文文化解体期をめぐる土器資料群の研究3—丹後～北陸西部域における“文様のない粗製深鉢群”の再検証—」『古文化談叢』第85集、九州古文化研究会、1～66頁
- 紅村弘、1956、「愛知県における前期彌生式土器と終末期縄文式土器との関係—土器型式の分類とその編年—」『古代学研究』第13号、古代学研究会、1～9頁
- 設楽博己、2004、「遠賀川系土器における浮線文土器の影響」『島根考古学会誌』第20・21集、島根考古学会、189～209頁
- 設楽博己、2009、「東日本系土器の西方への影響」『弥生時代の考古学2 弥生文化誕生』、同成社、188～203頁
- 設楽博己・小林青樹、2007、「板付 I 式土器成立における亀ヶ岡系土器の関与」『新弥生時代のはじまり第2巻 縄文時代から弥生時代へ』、雄山閣、66～107頁
- 杉原莊介、1949、「尾張西志賀遺跡調査概報」『考古学集刊』第3冊、東京考古学会、11～21頁
- 鈴木正博、1985、「「荒海式」生成論序説」『古代探叢Ⅱ』、早稲田大学出版部、83～135頁
- 鈴木正博、2000、「土器型式」の眼差しと「細別」の手触り—大洞 A1 式「縁辺文化」の成立と西部弥生式における位相—」『埼玉考古』第35号、埼玉考古学会、3～31頁
- 鈴木正博、2006、「三河・尾張に於ける浮線文系土器群の編年的位置について」『いちのみや考古』No.20、一宮考古学会、51～82頁
- 鈴木正博、2007、「「亀ヶ岡式」分布の南下と西日本の漆工芸—「彩色漆文様帯」による弥生式文化形成視点の確立—」『環境史と人間』第一冊、明治大学学術フロンティア、63～91頁
- 関根達人、2021、「西日本出土の大洞 A1 土器の製作地と製作者」『特別展図録 近畿最初の弥生人』、大阪府立弥生文化博物館、60～69頁
- 関根達人・柴正敏、2022、「居徳遺跡出土の大洞 A1 式装飾壺の製作地と製作者」『高知県立歴史民俗資料館紀要』第26号、高知県立歴史民俗資料館、1～12頁
- 関根達人・柴正敏・佐藤由羽人、2023、「居徳遺跡出土の北陸系・中部高地系土器」『高知県立歴史民俗資料館研究紀要』第27号、高知県立歴史民俗資料館、1～17頁
- 丹治康明、2000、「突帯文期の地域間交流」『突帯文と遠賀川』、土器持寄会論文集刊行会、793～803頁
- 出原恵三、2010、「弥生文化成立期の二相：田村タイプと居徳タイプ」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』、高知大学人文社会科学系、7～37頁
- 永井宏幸、1994、「沈線紋系土器について」『朝日遺跡Ⅴ(土器編・総論編)』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集、363～376頁
- 春成秀爾、2021、「木葉文土器の意義」『明石の歴史』第4号、明石市、13～44頁
- 春成秀爾、2023、「木葉文と農耕祭祀」『弥生文化博物館研究報告』8、弥生文化博物館、207～222頁

- 春成秀爾、2023、「四国の木葉文土器」『季刊考古学・別冊31 四国考古学の最前線』、雄山閣、29～32頁
- 久田正弘、1988、「八田中遺跡出土土器の考察」『八田中遺跡』、石川県立埋蔵文化財センター、72～90頁
- 久田正弘、2013、「西日本への浮線文土器と舟形土器・容器の波及」『石川県埋蔵文化財情報』第30号、石川県埋蔵文化財センター、25～34頁
- 深澤芳樹、1989、「木葉紋と流水紋」『考古学研究』第36巻第3号、考古学研究会、39～66頁
- 藤森栄一、1942、「七宝繫状文の石刀―薩摩仁田川の新資料―」『古代文化』第13巻第4号、日本古代文化研究会、36～39頁
- 豆谷和之、1995、「前期弥生土器出現」『古代』第99号、早稲田大学考古学会、48～73頁
- 豆谷和之、2002、「眼鏡状浮文から指づくね貼付突帯へ」『環瀬戸内海の考古学 上巻』、古代吉備研究会、253～266頁
- 宮里修、2016、「南四国の縄文晩期磨研浅鉢について」『海南史学』第54号、高知海南史学会、1～20頁
- 宮里修、2017、「居徳遺跡から縄文・弥生移行期研究を展望する―高知県における縄文時代研究の現状と課題―」『中四国縄文時代研究の現状と課題 発表要旨集』、中四国縄文研究会香川大会実行委員会、57～74頁
- 宮里修、2018、「晩期東日本系土器の四国・瀬戸内への波及」『中四国地方の外來系土器 発表資料集・集成資料集』、中四国縄文研究会島根大会実行委員会、33～52頁
- 宮里修、2022a、「南四国縄文晩期深鉢の型式分類と組列」『高知考古学研究』第6号、高知考古学研究会、1～26頁
- 宮里修、2022b、「南四国縄文晩期磨研鉢の分類と編年」『海南史学』第60号、高知海南史学会、1～22頁
- 宮里修、2023、「南四国出土土偶の系譜」『高知考古学研究』第7号、高知考古学研究会、1～21頁
- 宮地聡一郎、2017、「西日本縄文晩期土器文様保存論―九州地方の有文土器からの問題提起―」『考古学雑誌』第99巻第2号、1～50頁
- 湯尻修平、1983、「柴山出村式土器について」『石川考古学研究会々誌第26号別冊 北陸の考古学』、石川考古学研究会、233～255頁
- 湯尻修平、2011、「浮線渦巻文土器について」『石川考古学研究会々誌』第54号、石川考古学研究会、11～30頁
- 湯尻修平、2020、「乾式土器について(その1)」『石川考古学研究会々誌』第63号、石川考古学研究会、19～36頁
- 湯尻修平、2022、「乾式土器について(その2)」『石川考古学研究会々誌』第65号、石川考古学研究会、1～16頁

報告書

- 愛知県埋蔵文化財センター（石黒立人他）編、1994、『朝日遺跡Ⅴ（土器編・総集編・図版編・索引編）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集
- 愛知県埋蔵文化財センター（樋上昇）編、2002、『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集
- 秋田県教育委員会（小玉準）編、1983、『平鹿遺跡』、秋田県教育委員会
- 秋田県教育庁社会教育課（山下孫継他）編、1974、『鍔田遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第28集、秋田県教育委員会
- 石川県教育委員会（高堀勝喜他）編、1976、『能都町・波並西の上遺跡発掘調査報告書』、石川県教育委員会
- 石川県立埋蔵文化財センター（久田正弘他）編、1988、『八田中遺跡』、石川県立埋蔵文化財センター
- 石川県埋蔵文化財センター（岡本恭一）編、2001、『松任市乾遺跡発掘調査報告書A・C区下層編』、石川県埋蔵文化財センター
- 一宮市（澄田正一）編、1967、『新編 一宮市史 資料編二 弥生時代』、一宮市
- 大阪文化財センター編、1984、『山賀(その3)』、大阪文化財センター
- 大阪府文化財センター（田中龍男他）編、2008、『池島・福万寺遺跡Ⅴ』大阪府文化財センター調査報告書第179集、大阪府文化財センター
- 大阪府文化財センター（中尾智之他）編、2009、『讃良郡条里遺跡Ⅷ』大阪府文化財センター調査報告書187、大阪府文化財センター
- 大町市教育委員会（篠崎健一郎他）編、1990、『一津』大町市埋蔵文化財調査報告書第16集、大町市教育委員会
- 香川県教育委員会編、1988、『大浦浜遺跡』、香川県教育委員会
- 岐阜県教育委員会編、1989、『はいづめ遺跡』、岐阜県教育委員会
- 岐阜県文化財保護センター（藤田英博他）編、1994、『阿弥陀堂遺跡・深作裏垣内遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第18集
- 岐阜県文化財保護センター（長屋幸二）編、1995、『西乙原遺跡・勝更白山神社周辺遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第22集

高知県文化財団埋蔵文化財センター（藤方正治他）編、2002、『居徳遺跡群Ⅲ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第69集(1A・1C・1DN・1F区)

高知県文化財団埋蔵文化財センター（曾我貴行）編、2004、『居徳遺跡群Ⅵ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第91集(5A・3A・1C・4D区)

小松市教育委員会(福海貴子他)編、2003、『八日市地方遺跡Ⅰ』、小松市教育委員会

島根県教育委員会(鳥谷芳雄)編、2000、『三田谷Ⅰ遺跡 Vol.3』、島根県教育委員会他

島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（西尾克己他）編、2004、『家ノ脇Ⅱ遺跡 原田遺跡Ⅰ区 前田遺跡Ⅳ区』、島根県教育委員会他

島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（伊藤智他）編、2017、『古屋敷遺跡(A・E区)』、島根県教育委員会

智頭町教育委員会(酒井雅代他)編、2014、『智頭枕田遺跡』智頭町埋蔵文化財調査報告書12、智頭町教育委員会

徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会(勝浦康守)編、1997、『三谷遺跡』、徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会

鳥取市教育委員会(平川誠)編、1981、『古海遺跡発掘調査概報』

長野県教育委員会(小林秀夫)編、1982、『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書昭和52・53年度：茅野市その5』、長野県教育委員会他

根岸洋編、2021、『紀元前一千年紀前半の気候変動期における縄文晩期社会システムの変容プロセス』平成30年度～令和2年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究(18K12557)、国際教養大学アジア地域研究連携機構

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（本多達哉）編、1999、『大味地区遺跡群』福井県埋蔵文化財調査報告第43集、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（鈴木篤英）編、2006、『糞置遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第90集

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（山本孝一他）編、2012、『若宮遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第127集、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（清水孝之）編、2014、『曾根田遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第150集

松本市教育委員会編、1987、『松本市赤城山遺跡群Ⅱ』松本市文化財調査報告No.47、松本市教育委員会他

挿図出典

第Ⅳ④-1図 1～10・14：筆者実測(高知県立埋蔵文化財センター所蔵)、15：出原(2010：図10)、11～13・16：高知県埋文(2002：Fig.53・113・118)を一部改変、17：秋田県教委(1983：242頁)、18：筆者実測(湯沢市教育委員会所蔵)

第Ⅳ④-2図 1・3・4・8・11：筆者実測(徳島市教育委員会所蔵)、2・5・6・7・9・10：徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会編(1997：第25・32・36・37)を一部改変、12・16：筆者実測(島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所蔵)、13～15：島根県埋文(2000：第2図)、17：島根県埋文(2017：第70図4)、18：島根県埋文(2017：第36図)、19：香川県教委(1988：第137図)を一部改変、20：鳥取市教委(1981：第20図)、21～26：智頭町教委(2014：第87・102図)を一部改変

第Ⅳ④-3図 1：石川県教委(1976：第10図)、2～9・11・15・19・20・24：石川県埋文(2001：第75・79・84・85・92・96・101図)、10・13：筆者実測(石川県埋蔵文化財センター所蔵)、13：福井県埋文(2012：第33図)、14・21：石川県埋文(1988：第25・53図)、22：福井県埋文(2006：第50図)、23：福井県埋文(1999：第23図)

第Ⅳ④-4図 1・2・6：大町市教委(1990：図75・77・78)を一部改変、3：長野県教委(1982：図52)、4：松本市教委(1987：第40図)、5・7・9：筆者実測(大町市文化財センター所蔵)、8・10：筆者実測(尖石縄文考古館所蔵)、11：岐阜県文化財保護センター（1994：第10図）、12・13：筆者実測(岐阜県文化財保護センター所蔵)、14：岐阜県文化財保護センター（1995：第30図）、15：筆者実測(あいち朝日遺跡ミュージアム所蔵)、16～19・21：愛知県埋文(2002：遺物図版16・20・67・68・69)を一部改変、20：一宮市(1967：第7図)、22：愛知県埋文(1994：第180図)、23：大阪府文化財センター（2009：図310）、24：大阪府文化財センター（2008：図51）を一部改変、25：大阪文化財センター（1984：第19図）

第Ⅳ④-5図 宮里(2023：第7図)

第6図 筆者作成

※教育委員会は「教委」、埋蔵文化財センターは「埋文」とする。